

VI. 資料紹介

瓦器碗・土師器皿の成形痕

橋本久和

中世土器製作技法解明の意義

80年代をつうじて、中世の土器・陶磁器の研究は飛躍的に進展した。その結果、諸物資の広範な移動・流通とそれを支えた生産体制の確立が中世社会成立を考えるうえで重要であると認識されるようになった。広範に流通するものとして、輸入中国陶磁器や国産陶器、いわゆる中世須恵器などがある。これらは、生産地が特定でき、その流通範囲などをほぼ確認することができる。

これに対し、いわゆる在地土器は、その生産や消費のありかたが極めて不透明である。それは、器形や質の特徴などから比較的識別可能な陶磁器にくらべ、普遍的に出土するとはいうものの、その実態について研究が著しくたちおくらせているからである。

ここで主要にとりあげようとする瓦器碗の成形については、ごく最近まで内型造りで大量生産されたものにとらえられてきた。それは、器壁の薄さや法量が比較的均一であることが主要な根拠であった。そして、大量生産にもとづく商品的性格こそが中世土器の特質であるというかんがえが一般的であった。

しかし、畿内や畿内周辺の瓦器碗の実態を具体的に調査していくと、時期や生産地の違いによって、広範に移動するもの、生産地の周囲のみで生産と消費が完結するものの存在がわかってきた。その結果、分布のもつ意義が中世社会解明にとって大きな課題であると考えられるようになった。

このような研究過程で、瓦器碗の成型手法も単一ではなく、多様なものであることが認識されてきた。その多様性について筆者は「中世土器の製作技法ノート」（『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 1987年）などにおいて概要をのべてきた。その結果、従来の内型造りについては、再検討すべきものであるという認識が研究者間では得られているが、具体的な作業についてはほとんど進展していないのが現状である。

昨年度の年報において嶋上郡衙跡出土の黒色土器A類碗から在地の和泉型瓦器碗への転換について触れたが、その際両者が粘土紐作りであることをほぼ確認することができた。このように、中世土器の生産・流通を考える際、その基礎的な作業として瓦

器碗の成形手法はぜひとも解明しなければならない。その方法は唯一、瓦器碗・土師器皿を丁寧に観察することである。ここでは、成形の痕跡が比較的明瞭に観察できるものについて、写真撮影と実測をおこなったので資料紹介をしておく。

瓦器碗資料（図版第14・15）

資料は上牧遺跡（1・2・4・10）、上田部遺跡（3・6～8）、嶋上郡衙（9）淀川河床遺跡（5・11・12）から出土・採集したものである。5が大和型、9・11が和泉型、それ以外は楠葉型である。

楠葉型では粘土の結合痕が底部から口縁部にかけてほぼ垂直にみられるもの（1・12）と、底部から右上方にかけて斜め方向に粘土結合痕がのびるもの（2・3・10）がある。これらは先の論文で指摘したように粘土板の一部に、V字状の切り込みをいれて、その切り目を寄せたため生じる結合痕と理解できる。痕跡が斜めにみられるのは結合部の粘土を指でのばしたためと理解できるが、もう一案としてやや長手の粘土板を「左手手法」で一巻きにしたとも考えられる。これらは粘土結合痕の垂直あるいは斜めという違いはあるが、基本的には同じ成形でありAタイプとしておく。

つぎに楠葉型の4・6・8あるいは大和型の5、さらに和泉型の9・11には口縁部のやや下方あるいは体部に横方向の粘土結合痕がみられる。とくに9・11では粘土結合痕にそって指頭圧痕が続き、粘土紐を巻き上げていったことが解る。ただし、今回提示した資料では底部から口縁部まで続く粘土紐の痕跡を確認できるものはなかった。しかし、楠葉型のなかにも粘土紐で成形されるものがあることが確認できた。

さて、その粘土紐での成形は「左手手法」が基本であることは先の論文で明らかにしたが、9・11をみると、口縁部が大きく外反しているのである。このような粘土紐の痕跡と口縁部のありかたは、瀬戸内の吉備系土師器碗ときわめて類似している。つまり、粘土紐を巻き上げてまず底部から体部までを成形し、口縁部は別の粘土紐を付け足して成形するのである。11はこのようにして成形されたものとみられるが、6についても可能性を指摘しておきたい。このような粘土紐による成形を基本とするものをBタイプとしておく。

次に7をCタイプとするが、口縁部下方の粘土紐の痕跡はほぼ同じ高さでまわっている。そして、口縁部下位にそう粘土紐の痕跡と斜め方向の粘土紐痕跡がみとめられる。つまりAタイプの成形方法で、ある程度体部を作り、11のような方法をとって口縁部をつくっているわけである。

瓦器皿・土師器皿資料

瓦器碗の成形と基本的に同じであることは、先の論文でもあきらかにした。今回と

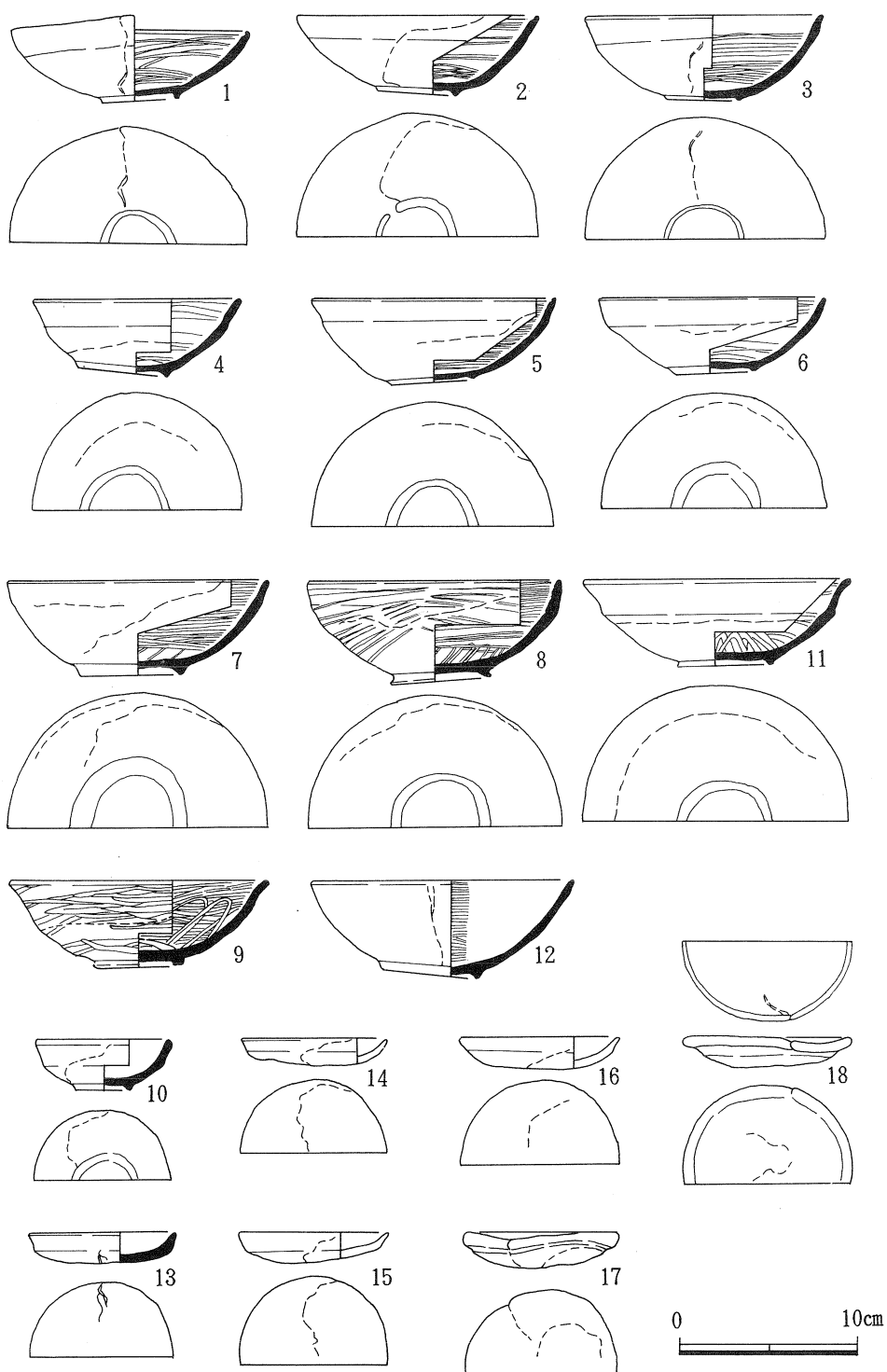


図1 瓦器碗・皿，土師器皿の成型痕

りあげたのはすべて淀川河床遺跡から採集されたもので、粘土の痕跡が明瞭に観察できる。瓦器皿（13）・土師器皿（14～18）ともAタイプの瓦器碗と同じ痕跡を確認することができる。17は一度成形したあと、口縁端部に切り込みを入れて口径を調整したものであろう。18の底部中央の痕跡については良くわからない。

まとめ

瓦器碗にみられるBタイプの成形手法は土師器の伝統的な「左手手法」であり、このタイプは先の論文の段階では和泉・大和型に確認できたが、今回は楠葉型においても確認できた。また、紀伊型においても確認しているため土師器製作手法の延長で瓦器碗が製作されたことをしめしている。

一方、Aタイプは12のように楠葉型Ⅰ期・11世紀には確認することができる。これに先行する楠葉型黒色土器B類碗には粘土紐の痕跡の認められるものがあり、現状ではAタイプと瓦器碗の出現は同時期とかがえられる。このAタイプと同じ手法は10世紀末の「て」字状口縁の土師器皿にすでにみとめられている。口径10cm前後の土師器皿の出現が10世紀中頃から後半であり、それ以前の皿・杯がすべて「左手手法」で製作されていることをかんがえると、まず土師器皿に新しい製作手法が現れ、それが瓦器碗の製作に導入されたのである。このような土師器製作の技術革新が10世紀後半から11世紀にかけてあったことがかんがえられるが、その技術革新は「左手手法」の発展形態であることを忘れてはならない。また、Ⅰ期でAタイプの確認できるものは楠葉型にかぎられている。Aタイプは近江型黒色土器にもみとめられる手法であり、楠葉を中心に周辺に拡散していったものとみられる。

また、AタイプとBタイプの折衷とみられるCタイプが楠葉型にみられるが、Ⅱ期に属す7・8では口縁端内側の沈線はみられず、器壁もやや厚手である。このタイプの瓦器碗が上田部遺跡でまとまって出土し、しばしば他の遺跡でもみられる。このため、楠葉型のなかでも特定の製作集団によるものかもしれない。あるいは淀川北岸に生産地が存在した可能性も考慮する必要がある。

さて、先の論文では型作り説にたいする疑問はなげかけたが、A・B手法は型の上でおこなわれたとかがえた。今回、ここに提示したのも粘土の痕跡については明確に指摘できるが、型作りを否定も肯定もすることができない。ただ、短絡的に瓦器碗の商品性をかんがえる根拠となった点について実証的に検討をくわえることの必要性を指摘したい。